



# 元気っ子

No.283 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

令和2年度も残すところあと一ヶ月となりました。今月は卒園式も控えています。より一層気を引き締めて参ります。

世界的な医学雑誌NEJMに新型コロナウイルス感染症の感染者数が世界的に減少していることの要因が考察されています。そこにはウイルス自体の弱毒化だったり、不顕性感染者が実際の感染者数の3倍近く存在しており、自然の集団免疫が獲得されつつあるというものでした。もし、この考察が正しければ、少し未来が明るくなるように感じました。一日も早く、人と人との触れ合いを大切にできる日常が戻ってくることを願います。

コロナ禍において、人類は「新しい生活様式」を身につけましたが、保育においても「新しい保育様式」を考えなくてはならなくなりました。ながさわ保育園ではコロナ以前から「コーナー保育」という環境を用意してきました。これは子どもたちの活動が分散しますので、コロナ禍において、子ども同士の距離を確保する意味で、一斉に皆で同じことをやらせるよりも効果的でした。また、「選択制保育」も今年度は力を入れておりましたので、乳児クラスの子どものも比較的分散しての活動が多かったのも良かったらと思います。

しかし、これらの「コーナー保育」「選択制保育」いずれも、コロナ対策のためだけのものではありません。これらは元々、「子どもの権利条約」における「意見表明権」を保障することが目的でした。子どもの意見の表明の一つとして、自分のやりたい遊びを選択する時間を保障するものです。

これらの保育は結果的にコロナ対策としても有効でしたが、「新しい保育様式」を考えるうえではコロナ対策と同時に、今後の時代においてどのような保育が必要とされるのかを考えていかななくてはなりません。この考え方は OMEP（世界幼児教育・保育機構）も「コロナ禍にあっても子どもの最善の利益を最優先にした保育を展開していくことが必須である」と提唱しています。

今、在園の子どもたちが社会の第一線で活躍するのは20～30年後です。この時代に一番求められる能力は、先月の「元気っ子」でも書きましたが、「非認知能力」です。子どもたちの未来社会は価値観の多様化によって、答えの決まっていない問題が充満している社会になっていると言われています。そんな社会で一つの答えを追い求める事は不可能に近いでしょう。それならば、できるだけ多くの人々が幸せになれるような「最適解」を見つけ出す必要があります。この「最適解」を見つけ出すために必要な能力が「非認知能力」です。そして、この能力こそ、乳幼児期にその基礎を身につけておかななくてはなりません。

これからもコロナへの対策は継続していかなくてはなりません。しかし、同時に「子どもの権利条約」を保障し、人間の社会の在り方、生活の仕方、そこから子どもの未来社会をしっかりと見つめ、今の時代に求められる「新しい保育様式」をしっかりと考えながら今後も子どもたちと一緒に学び合っていきたいと思ひます。令和3年度もどうぞよろしくお願い致します。

